『黒い雨』はどのように読まれてきたか？

中野和典

一 「庶民」と「日常」という読み方の成立

これから私と齋藤一さんと中谷いずみさんが二〇分ずつお話をします。まず私が『黒い雨』がこれまでにどのように読まれてきたのかというお話をしまして、続けて齋藤さんと中谷さんからそれぞれ問題提起をしていただいた上で全体で討論を行います。

では、さっそく私の話に入ります。『黒い雨』は「原爆文学」の代名詞と言えるほど知名度の高い作品ですが、まず、どのようにして成立したのかということから確認しておきます。『黒い雨』は一九六五年一月から翌年九月まで「新潮」に連載されました。はじめは「姪の結婚」という題名だったのですが、連載八回目（一九六五・八）から「黒い雨」に改題されています。そして、一九六六年の一〇月に新潮社から単行本『黒い雨』が出版して、その後再刊されたものを確認できたものだけごとと資料に載せています（『新潮日本文学 井伏鱒二集』新潮社、一九七〇・一／『黒い雨』

新潮文庫、一九七〇・六／『現代日本文学大系 65 井伏鱒二・上林曉集』筑摩書房、一九七〇・八／『井伏鱒二全集』第一三巻、筑摩書房、一九七五・一／『井伏鱒二自選集』集英社、一九七八・一一／『新潮現代文学 2 黒い雨・駅前旅館』新潮社、一九七九・六／『井伏鱒二自選全集』第六巻、新潮社、一九八六・三／『昭和文学全集』第一〇巻、小学館、一九八七・四／『井伏鱒二全集』第二三巻、筑摩書房、一九九八・一二。まだ他にもあるかもしれませんが。

研究文献については、管見に入ったものの題名だけを資料の最後に載せています（本稿末尾の『黒い雨』研究文献「一覧」参照）。何を確認していただきたいのかと言いますと、一九六〇年代、七〇年代、八〇年代、九〇年代、二〇〇〇年代と、時代を下るにつれて論の数がどんどん増えているということです。『黒い雨』が今でも大きな関心を集めつづけているテキストであることが分かります。文献につけた整理番号が二〇〇に迫っていますが、『黒い雨』を主な対象としていない文献まで含めると、もっと多くなると考えられます。今回は時間も限られていますので、この中で

も特に後の文献において繰り返し引用されるものや、その他にも重要と思われるものに絞っていくつか見ていきます。

まず、河上徹太郎の「井伏鱒二の途——文学時評（七）——」

（「新潮」一九六五・一二）です。これはまだ『黒い雨』が連載されている最中に書かれたものですが、河上は後に新潮文庫版の解説を書くことにもなりますので、これはおそらく今までに最も多く読まれている『黒い雨』論の原型に当たるものと言うことができます。ここで河上は〈これでもかと残酷さを発きたてた描写、怒りと憎しみをぶちまけた叙述、——さういつた原爆小説は出尽したし、効果も薄い〉のに対して〈この小説では、お馴染の井伏の庶民がたまたまこの惨禍に出遭った〉、〈この未曾有の惨禍を日常性のうちに描いた〉（傍点引用文）、〈素朴な表現が、文中非常に光つて見える〉と述べています。『黒い雨』は連載中すでに「庶民」や「日常」をキーワードにして肯定的に評価されていたことが分かります。これらの言葉は、連載が終った時点で書かれた江藤淳の「文芸時評（上）」（「朝日新聞（夕刊）」一九六六・八・二五）における〈異常時を語るにあたって、作者が見事に平常心をつらぬき通している〉、〈原爆をどんなイデオロギーにも曇らされぬ眼で、これほど直視し切った小説を私ははじめて読んだ〉といった評価に引き継がれています。これは江藤評とほぼ同時期に書かれた山本健吉の「文芸時評（上）」（「読売新聞（夕刊）」一九六六・八・二九）と平野謙の「九月の小説（上）」（「毎日新聞（夕刊）」一九六六・八・三二）においても同様です。山本は〈農村出らしい素朴な感覚で、原爆を受け取っている〉、〈原爆を描いて、しかもあらゆる政治的俗念から自由〉であると述べました。また平野は〈原

民喜の三部作や大田洋子の長編・短編〉を〈私どもにおなじみの私小説的リアリティがまず前提されていた〉ものとする一方で、被爆者ではない井伏が書いた『黒い雨』は〈ひとつのフィクションとして、作者はあえてヒロシマ原爆を一長編にまで構築した〉ものであり、さらに〈イデオロギー抜きに書いている〉と述べています。

このように江藤・山本・平野の三人は「庶民」や「日常」という河上徹太郎の見方を引き継ぎながら、〈イデオロギーに曇らされぬ眼で〉、〈政治的理念から自由〉に、〈イデオロギー抜きに書いていると、一様に『黒い雨』の「非政治性」を高く評価しています。ここには『黒い雨』の成立時期に原水協と原水禁がソ連の核実験再開や部分的核実験禁止条約をめぐって激しく対立していたことへの批判がこめられていました。『黒い雨』が書かれた一九六五年は、はじめは超党派的に行われていた原水爆禁止運動が分裂していく時期とちょうど重なっていたのです。その状況において江藤・山本・平野は「庶民」や「日常」という河上が示した見方に、新たに「非政治性」という見方をつけ加えました。

翌一九六六年に井伏は野間文芸賞を受賞しました。そのときの井伏による「受賞のことは 感想」（「群像」一九六七・二）は〈要するにこの作品は新聞の切抜、医者のカルテ、手記、記録、人の噂、速記、参考書、ノート、録音、などによつて書いたものである。ルポルタージュのやうなものだから純粋な小説とは云はれない。その点、今度の野間賞を受けるについて少し気にかかる〉というものでした。これを先ほど見た、原民喜や大田洋子の作品は〈私小説的リアリティ〉が前提になっていたという平野の言葉と

合わせて考えれば、あえて単純化して言うところ、おそらく原や大田の「原爆文学」は〈私小説〉が生み出すリアリティに支えられていたのに対して、『黒い雨』は〈ルポルタージュ〉が生み出すリアリティに支えられているという見方がこのときには成立しているように見えます。

野間文芸賞の選評「銓衡委員の言葉」(「群像」一九六七・一)を見ると、やはり伊藤整は〈異常な大事件を、市井の男女の眼で見させ〉て書いている、大岡昇平は〈被爆の状態を、この作者の特有の庶民的感觉で書いている〉と評価しています。河上徹太郎は一九六六年に井伏が文化勲章と野間文芸賞をダブル受賞したことに對して〈最高の顕彰をしたいと思はせる作である〉とその功績を称えた上で〈この夏これが完結した時、平野謙、山本健吉、江藤淳三氏が、異口同音に私の讃辞と大体同じ趣旨のことを新聞の時評で書いてゐた。こんなに皆の意見が一致することも珍しい〉と、『黒い雨』の「庶民」性も「日常」性も先に指摘していたのは自分なんだぞと言わんばかりのコメントを寄せています。

そして、一九七〇年には先ほども述べた通り、河上は『黒い雨』論としては今までにおそらく最も多く読まれてきたであろう新潮文庫版の解説『『黒い雨』について』(『黒い雨』新潮文庫、一九七〇・六)を書いています。やはりここでも繰り返されるのが〈日常性〉(平凡な人たち)〈善良な市民〉(恒^{ホト}の心)〈非凡な平凡さ〉(庶民性)〈民衆に対する無言のいたわり〉といった言葉です。重松のことを〈市井の聖者〉というところまで持ち上げている点は、それまでの河上論とは違いますが、基本的にはその「庶民」性と「日常」性を改めて強調しています。これはまさに中谷さん

が『その「民衆」とは誰なのか』(青弓社、二〇一三・七)の中で問題にしておられることと密接に関わりがありそうですが……。とにかく、このようにして『黒い雨』を「庶民」と「日常」という視点から高く評価する大きな流れが形成されていきました。

二 ささまざまな反論

こうした評価に対する反論もあります。大江健三郎は「被爆者の自己救済行動」(「世界」一九六七・五)において『黒い雨』を原民喜の作品と断絶したものとして捉えることに反対した上で、結局〈批評家が『黒い雨』をこのように最上級の讃辞でかざるのは、かれの一箇の戦後日本人としての原爆体験へのうしろめたさ、気懸りさが、「平常心」という観念・情緒を見出すことによつてぬぐいざることができるとに気がついたにすぎない〉からであると述べています。批評家たちが『黒い雨』の〈平常心〉を称揚するのは、戦後に被爆者たちが十分な援護を受けられていないことを〈他人事〉とし、〈原爆体験の真実〉に向き合うことを避けようとしているからだとその姿勢を批判しています。長岡弘芳も『原爆文学史』(風媒社、一九七三・六)において〈原、大田から井上、いいたまでを含む人間の誠実さの、総体としての連環のなかの、一つの個性的営為として、「黒い雨」一篇はあくまで存在する〉と、やはりそれまでの「原爆文学」と『黒い雨』との連続性を強調しています。

金子博は「戦後の文学・論(その1)——井伏鱒二『黒い雨』——」(「国文学論考」一九八六・三)において『黒い雨』の「非

政治性」に疑問を投げかけています。『黒い雨』は重松が姪の矢須子を何とか結婚させよう、縁結びをさせようとしているところから始まります。その縁結びのために原爆との縁切りをさせたい、そのために矢須子の日記を重松が清書し始めるというふうな物語は展開します。しかし、しばらくすると矢須子は原爆が爆発した瞬間には（爆心地から十キロ以上も離れたところにいた）（2）けれども、そのあと黒い雨を浴びていたという日記の記述にぶつかってしまいます。被爆直後ならともかく、物語の現在は（終戦後四年十箇月目）（1）ごろです。黒い雨にそれなりの害があることを誰でも知っています。それで矢須子の日記の清書は中断してしまい、これはどうしたものかと重松と妻のシゲ子は思い悩むことになりました。しかし、金子はこの展開には矛盾があると指摘します。（矢須子が泉水で手を洗わせたが汚れは落ちなかった。黒い雨が降った跡だと云うのだが、皮膚にびったり着いている）（6）と重松が自分の日記に記していることだけを見ても彼らが矢須子が八月六日に黒い雨を浴びていたのをすでに知っていたことは明らかであり、矢須子の日記を清書しようとする最初の時点で、やがて彼女が黒い雨を浴びたという記述にぶつかるとも当然分かっていたはずなのです。小説のはじめに（広島や長崎が原爆されたこと）を（みんなが忘れとる）（2）と非難する場面があります。金子は（重松夫妻（本来は（閑間夫妻）と言っべきか——中野注）は無意識のうちに、あるいは意識してそのことを忘れようとし、また、事実をそのように「風化」させて来たのではないかと）と実は重松たちにも原爆にまつわる記憶の忘却や隠蔽が起っていたのではないかと指摘しています。このことから金子は（発

表当初の、江藤淳、佐伯彰一、山本健一などの時評にみる、「平常心」や「生活者」や「イデオロギーに曇らされぬ眼」を、傑作だとする根拠にするような評価のしかた）を（脱イデオロギー的な傾向の文学を称揚し、戦後派文学の否定という枠組みで戦後文学史を構築する際に、『黒い雨』をもその材料にするような、ひとつの、今日的批評状況を物語るものである）と捉えて『黒い雨』の「非政治性」を称揚すること自体の政治性を批判します。つまり、『黒い雨』は（イデオロギー）を離れているというけれども、たとえ見えにくいものであっても（イデオロギー）はいたるところにある。半ば無意識的ではあっても、何かを忘れたり隠蔽したりすること自体が一つの（イデオロギー）なのではないか、という捉えなおしがここで行われています。そして、金子は重松が自分の「被爆日記」を（わしのヒストリー）として書くというその後の展開に（核の支配する現代的状況とその根源的な退廃にはつきりと対峙する姿勢）を読み取っています。

黒古一夫は『原爆文学論 核時代と想像力』（彩流社、一九九三・七）において（井伏は（被爆者の平常心）に無意識的であれ安住していなかっただかと、『黒い雨』が（平常心）をもって原爆を描いていること自体を否定的に評価しています。それは（原爆）にたいして、作者の態度は余りにも冷静すぎる）からであり、（この小説にもう少し（核時代）に対するグローバルな視点が欲しかった）からだとも言います。この（グローバルな視点）とは（ヒロシマ・ナガサキ）の被害者は日本人だけでなく、また世界にはアトミック・ソルジャーをはじめヒバクシャが多数存在する）ことを視野に入れることを意味しています。このような黒古の視点

から見れば、『黒い雨』の最大の問題点は、原爆（被爆）を（被害）の観点でしか描いていないことである」ということになりま

す。

川口隆行は「原爆文学」という問題領域^{プロブレマティク}（「プロブレマティック」二〇〇一・七）において『黒い雨』が「庶民」の戦争への怒りを代弁したと評価され、無垢な戦争被害者といった自己表象を生産する契機として機能した」ことを指摘し、その「庶民」という自己表象が（加害者としての過去を忘却する誘惑に満ちた）ものでもあったと論じています。川口論も『黒い雨』に自らの加害者性の忘却を読んでいるという点では黒古論に似ているように見えますが、根本的に違うところは、なぜそれが起こっているのかという問題にまで踏み込んでいます。川口は七〇年代に『黒い雨』と「夏の花」が国語の教材として教科書に採録されていることに注目します。そして、これが（この時期にトラウマ記憶から物語記憶への変換、ある種の社会的合意形成が行われた）ことを示していると言います。この（トラウマ記憶から物語記憶への変換）というのは簡単に証明できることはありませんが、その根拠の一つとして（根っから人のいい中流の村娘）（叔父叔母によく事え、その愛撫^{あいぶ}に価する処女）（河上徹太郎、新潮文庫版『黒い雨』解説、前掲）といったいわゆる（原爆乙女）としての矢須子像と、いつまでも原爆の被害とその忘却を告発し続けるいわゆる（怒れる大田洋子）像という対照的なイメージがある中で、大田洋子が忘れ去られて矢須子が受け入れられていくことが挙げられています。そして、このような（変換）の背後には（ナショナルな欲望）が働いているのだと川口は指摘します。

越前谷宏は「国語教科書の中の戦争——井伏鱒二『黒い雨』の場合」（『龍谷大学論集』二〇〇五・一）において、そもそも重松は「庶民」なのかという問題をしています。たとえば（「富・（知識）（権力）といった指標」で見たとときに、（農地解放以前には米糧倉に米俵を高々と積んでいた）（3）という地主階級であった重松の財力、煙草を（英語辞書の薄い紙で巻いて）（一冊喫ってしまいました）（4）という挿話が暗示する重松の学歴、（月のうち二十七八日までは十二時半前に出社していた）（20）という重松の地位、あるいは（七年間ほど陸軍糧秣廠に）（12）勤めたあと、軍需工場である（日本繊維会社の古市工場）に勤め、（宇宙品の日本通運）の支店長に（二三の機密事項は口頭で述べた）（6）と振る舞うことができる重松の権限、これらを合わせ考えてなお重松を「庶民」と呼ぶことができるのかと越前谷は疑問を呈します。また、越前谷は国語教科書の指導書にも注目して（「冷静」で「厭戦的」で「平和」を愛する重松、まさに好ましい人物ではないか。国語教育が少なからず担ってきた「人格教育」の臭いがする）とも批判しています。確かに、重松は（軍に頼って軍に叩かれ、むさぼられる）（12）という経験もしていますが、しかし、少なくとも（底辺に位置していたわけではない）という越前谷の指摘は『黒い雨』の本文を根拠にしているがゆえに説得力があります。そもそも（僕が古市工場に勤めているのを幸いに、ずるく立ちまわって矢須子を工場長の伝達係にするように工作した）（6）という微用逃れは「庶民」にできることなのでしょうか、そうじゃありませんよね、ということですよ。

それから越前谷論で興味深かったのは、重松が原爆のキノコ雲

について（蒙古高句麗の雲とはよく云い得たものだ）（3）と語っていることについての考察です。（ムクリコクリ）という音に（蒙古高句麗）の字を当てるとするのは、原典の『重松日記』にはない井伏の創作です。（蒙古高句麗）とはいわゆる元寇、蒙古襲来を連想させる言葉ですが、この蒙古襲来の記憶が呼び覚まされた機会が三度あったと言います。一度目が幕末の黒船来航時、二度目が日清・日露戦争時、三度目がアジア・太平洋戦争時。（元寇弘安役六百五十年記念会）を中心に全国規模で記念行事が行われた」といった動きは特攻を「神風」と呼ぶ発想とセットになっているのですが、戦中は日本が蒙古襲来の時のような外圧を受けていると喧伝する中で戦意昂揚が図られていたと言います。つまり、原子雲を（蒙古高句麗の雲）と呼ぶ重松の発言は、まことに当時の時流に適った、きわめて政治的な発言と解釈することができるのです。これを根拠に越前谷は（重松もそうした国民的記憶から自由ではない）とその政治性を指摘しています。このように考えると、『黒い雨』は単に「庶民」を描いたものでも、非政治的なものでもないということになります。にもかかわらず結末部で終戦の詔勅を聴いて泣いている女子工員を見て（僕の目にも涙が込みあげて来た）（20）という重松は（女子工員や炊事婦の側に自分を滑り込ませ）ているのであり、ここには（軍部の独走と、それに騙され翻弄された国民といった戦争認識のステロタイプな図式が透けて見える）のだと越前谷は言います。そして『黒い雨』が非政治的なものに見えるのは、この小説が（公式の物語）に近似しているがゆえに、無色透明にもみえてしまう戦争イデオロギー）を持つているからであると結論づけています。

三 残された課題

以上、『黒い雨』を「庶民」と「日常」という視点から肯定する読み方の成立と、それへの反論について大きな流れを辿ってきました。最後に、これとは少し異なる角度から残された課題を探りたいと思います。日高昭二は『黒い雨』研究（国文学解釈と鑑賞 別冊 井伏鱒二の風貌姿勢 一九九八・二）において（黒い雨」というテクストが、意外に読まれていないという印象を禁じ得ない」と述べています。これは『黒い雨』とそれ以前の「原爆文学」との関係、『黒い雨』とそれが書かれた同時代的な状況との関係、『黒い雨』と『重松日記』をはじめとする原典との関係といった、作品とその周辺についての論考が充実しているのに比べて、作品そのものに対する分析は手薄になっているのではないかと指摘です。今回、私も『黒い雨』がどのように読まれてきたかを自分なりに整理してみても日高に近い印象を持ちました。ここで日高が指摘したことは、現在においてもなお課題でありつづけていると思います。

そのような課題を意識しながら、日高は『黒い雨』における（似て非なるもの）に注目しています。（似て非なるもの）とは、たとえば、小島村の勤労奉仕の青年団員たちが終戦の日の早朝に怪我人を探しに行く途中で竹槍を（縁側を貸してくれた農家へ置土産）（1）にしたという挿話と、原爆投下の前に米軍機が（いずれ近いうちに、ちよつとしたお土産を、広島市民諸君にお目にかけたい）（3）という伝書を落としたという挿話が（土産）

という言葉でつながっているというように、ある言葉が全く異なるものごとを指示していることを指します。あえて「土産」という言葉を重ねることによって、竹槍と原爆の違いを強調する効果が生まれているということです。あるいは、被爆したときに重松が「B 29 が落したのは人間の目をつぶす有毒爆弾」(2) だと思いい込んだという挿話と、そのとき重松が「眼鏡と帽子を落した」(3) という挿話が「落した」という言葉でつながっていることも原爆と眼鏡・帽子の違いを強調していると言え、指摘していません。このような「似て非なるもの」が『黒い雨』にはさまざまに描かれていて、その「鋭敏な統辞性」によって言葉の指示対象どうしの決定的なずれ、あるいは言葉と指示対象との決定的なずれが示されているのだと言います。そして、そのずれは原爆が「一瞬前までは、日常の延長としてあったものが、たちまち『似て非なるもの』に変貌する」という状況を生み出したために生まれていると言います。このように『黒い雨』に「ヒトビトを襲った言語の不通」を読むというのが日高の論です。ここで提示されている「似て非なるもの」という視点を、さらに突き詰めていけば『黒い雨』の解釈の可能性をもっと広げられるのではないかと興味深く思いました。

最後に松本鶴雄の「『黒い雨』の時間論」(『社会文学』一九九〇・七)を見ます。これは『黒い雨』の時間構造に注目した論です。

『黒い雨』ではいろいろな人によって被爆体験が語られるので、作中で何度も原爆が爆発することになります。松本が数えたところによると「原爆投下の炸裂時は十三回も描かれている」ことになるといいます。そして、松本は登場人物たち(あるいは読者)が繰り返

返し八月五日に連れ戻されるという円環的な時間構造が『黒い雨』において作り出されているのだと言います。重松が矢須子の日記を清書し始めるのがおそらく「終戦後四年十箇月日」(1) ころで、先ほども述べた通り、その中で彼女が黒い雨を浴びていたという記述にぶつかってその清書が中断し、代わって重松が「あのとき爆心地から二キロぐらいの横川町で頬を火傷したが、それでもまだこうして生きている」(2) ことを矢須子の結婚の世話人に示そうと考えて、矢須子の日記の附録篇として自分の「被爆日記」を清書し始め、さらにそのまた附録篇としてシゲ子が「広島にて戦時下に於ける食生活」(4) を書き、そうこうしているうちに「矢須子が原爆病の症状を現し始めた」(15) という事態に陥って縁談は流れ、矢須子の治療に役立てるためにシゲ子が「高丸矢須子病状日記」(16) を書き始め、矢須子を元気づけるために「広島被爆軍医予備員・岩竹博の手記」(17) が重松のもとに届けられ、最後に重松が「被爆日記」の清書を終える。以上が『黒い雨』の大きな流れです。日記の清書は最初は矢須子の縁談のためになされていたことでしたが、矢須子が倒れてからは日記を清書すること、あるいは新たに書くことの目的も変わっていません。重松は一九五〇年の広島原爆追憶日を前に「あと三日だ。筆記を急がねばならぬ」(19) と、なぜか八月六日までに清書を終えようとするようになります(この八月六日という日付への重松のこだわりは、矢須子の発病によって「被爆日記」を清書する意味が彼女の縁談から「図書館へ納めるわしのヒストリー」(2) を書くことへと移行していることから生まれているのかも知れませんが)。重松がその「翌日まわしで「被爆日記」の清書を仕上げ」(19)、さらに

（その翌日の午後）（20）に「孵化池を見に行く場面」で『黒い雨』は終わっています。つまり、この小説は一九五〇年の八月五日の場面で終わっていることとなります。これと『黒い雨』の最初に矢須子の日記が一九四五年の八月五日分から清書されていることを合わせて考えると、年数こそ違いますが、『黒い雨』の時間は八月五日に始まって物語の終わりにまた八月五日に戻って来ていることが分かります。生き残った被爆者たちは何とか原爆と縁を切り、その円環を脱け出そうとするのですが、矢須子の発病が象徴しているように、一九四五年という過去に一九五〇年という現在がからめとられてしまつて脱け出すことができません。松本はそのような被爆者のありようが物語の円環的な時間構造によつて描かれているのだと分析し、『黒い雨』を「八月五日」という原点、あるいは起点へのやむことのない永劫回帰感の表象」と意味づけています。『黒い雨』の構成に注目した論として非常に示唆的です。このような本文分析を緻密に積み重ねていくことが、これから『黒い雨』を読み継いでいく上でより重要になるのではないかと思います。以上で私の話は終わります。

付記

ワークショップの後考えたことを簡単に記しておく。当日は『黒い雨』の本文分析の優れた試みとして日高昭二論と松本鶴雄論に特に注目したが、両論を合わせ考えることによつて見えてくることもある。それは日高が指摘している（似て非なるもの）と、松本が指摘している円環的な時間構造が互いを補い合うものであるということである。日高が指摘する通り『黒い雨』には（似て非なるもの）が満ちており、それに注目することによつて（言語

の不通）という閉塞状況が見えてくる。また、松本が指摘する円環的な時間構造もそれに注目することによつて（永劫回帰）という閉塞状況が見えてくる。つまり、日高論は細やかな言葉の側面から、松本論は大きな構成の側面から『黒い雨』が形象化している閉塞状況について論じているのである。

ただし、もちろん両論の指摘は大きな前提になるとして、では『黒い雨』は言表としても構成としても閉塞状況しか描いていないのか、という疑問は残る。これを考えるには、やはりさらなる本文の分析、特に（似て非なるもの）の機能についてつづぎに検討を加えた上で、作品とその周辺の問題にも立ち返ることが必要になりそうである。これは私自身の今後の課題としたい。

『黒い雨』研究文献一覧

- 【一九六〇年代】1 河上徹太郎「井伏鱒二の途—文学時評（七）—」（『新潮』一九六五・一二）／2 江藤淳「文芸時評（上）」（『朝日新聞（夕刊）』一九六六・八・二五）／3 山本健吉「文芸時評（上）」（『読売新聞（夕刊）』一九六六・八・二九）／4 平野謙「九月の小説（上）」（『毎日新聞（夕刊）』一九六六・八・三二）／5 森川達也「時評（文芸）記録と小説について」（『図書新聞』一九六六・一〇・一）／6 佐伯彰一ほか「創作合評『黒い雨』（「群像」一九六六・一〇）／7 菅原国隆「『黒い雨』と井伏鱒二」（『新刊展望』一九六六・一一）／8 多田道太郎「『黒い雨』井伏鱒二」（『日本小説を読む会・会報』一九六六・一一）／9 北村美憲「井伏鱒二『黒い雨』論」（『新日本文学』一九六六・一二）／10 日沼倫太郎「井伏鱒二著『黒い雨』（『図書新聞』一九六六・一二・三）／11 月村敏行「原爆」文学の破綻—井伏鱒

二「黒い雨」の勝利と敗北」(『日本読書新聞』一九六六・一二・一二)／12 佐伯彰一「小説家と記録者」(『朝日新聞(夕刊)』一九六六・一二・八)／13 井伏鱒二「受賞のことは感想」(『群像』一九六七・一)／14 石坂洋次郎ほか「銓衡委員の言葉」(『群像』一九六七・一)／15 古林尚「井伏鱒二の『黒い雨』」(『文学的立場』一九六七・二)／16 まつもとつるを「井伏鱒二の現実認識―『黒い雨』とその評価をめぐって」(『文学者』一九六七・三)／17 多田道太郎「井伏鱒二『黒い雨』・ふるさとに落ちた原爆―戦後バスターセラー物語―71」(『朝日ジャーナル』一九六七・三)／18 諸家「合評・井伏鱒二著『黒い雨』」(『日本文学』一九六七・四)／19 大江健三郎「被爆者の自己救済行動」(『世界』一九六七・五、のち『持続する志』文藝春秋、一九六八・一〇)／20 寺田透「『黒い雨』」(『世界』一九六七・七)／21 東郷克美「『黒い雨』感想」(『研究年誌』一九六八・一)／22 大野晋「『黒い雨』と『炎える母』」(『文学界』一九六八・二)／23 安田武・高橋和巳「『黒い雨』について」(『ふたたび人間を問う』雄渾社、一九六八・一二)／24 武田勝彦「西欧の日本文学研究(3)―ヘレン・マッカロウ女史の『伊勢物語』、『黒い雨』の手法をめぐって―」(『国文学 解釈と教材の研究』一九六九・六)／【一九七〇年代】25 開高健「紙の中の戦争―8―井伏鱒二『黒い雨』の場合」(『文学界』一九七〇・二)／26 沼田卓爾「井伏鱒二―『黒い雨』と『武州鉢形城』」(『日本文学・60年代から70年代へ(特集)―文学に見る60年代・作家と作品』(『民主文学』一九七〇・六)／27 河上徹太郎「『黒い雨』について」(井伏鱒二『黒い雨』新潮文庫、一九七〇・六)／28 桜井幹善「生と死をみつめて―井伏鱒二『黒い雨』をめぐって」(『民主文学』一九七一・八)／29 桑名靖治「『黒い雨』

論」(『日本文芸論攷』一九七二・五)／30 寺横武夫「『黒い雨』管見―庶民文学の方法について―」(『近代文学試論』一九七二・九)／31 徳永恂「黒・水中世界・自然のナルシズム―井伏鱒二論」(『人間として』一九七二・一二)／32 金井洋子「井伏鱒二の文学―『山椒魚』と『黒い雨』―」(『文学』一九七三・二)／33 長岡弘芳「原爆文学史」(『風媒社』一九七三・六)／34 磯貝英夫「『黒い雨』」(『国文学 解釈と鑑賞』一九七三・八)／35 大内章好「『黒い雨』―長編としての扱い―」(『国語』一九七四・三)／36 桑名靖治「二つの哀歌―『黒い雨』と『夏の花』―」(『国語』一九七五・一)／37 遠藤道丸「『黒い雨』の授業展開」(『国語通信』一九七六・三)／38 丸尾寿郎「小説『黒い雨』の授業―実践をふまえながら―」(『国語通信』一九七六・三)／39 松本鶴雄「『黒い雨』論・序―『多甚古村』の戦争体験、『黒い雨』論―日常と以上のシーソーゲームの構図」(『井伏鱒二論』冬樹社、一九七八・五、のち『増補版 井伏鱒二 日常のモチーフ』沖積舎、一九九二・一一、のち『井伏鱒二論全集』沖積舎、二〇〇四・二)／40 平岡篤頼「井伏鱒二覚え書き―物語の氾濫」(『文体』一九七九・六)／41 丸尾寿郎「『黒い雨』の授業」(『教育評論』一九七九・八)／【一九八〇年代】42 加藤周一「『日本文学史序説下』(平凡社、一九八〇・五)／43 大越嘉七「井伏鱒二の文学」(『法政大学出版局』一九八〇・九)／44 涌田佑「私注・井伏鱒二」(明治書院、一九八一・一)／45 首藤明子「文学教材としての『黒い雨』について」(『国語国文論集(安田女子大学)』一九八二・九)／46 植垣節也「現代文教材研究講座 14 井伏鱒二(四)―『黒い雨』の評価―」(『月刊国語教育』一九八二・一〇)／47 植垣節也「現代文教材研究講座 15 井伏鱒二(五)―『黒い雨』の描写―」(『月刊

国語教育」一九八二・一) / 48 田辺健二「武州鉢形城」から「黒い雨」へ」(『近代文学試論』一九八三・六) / 49 寺横武夫「黒い雨」略注」(『近代文学試論』一九八三・六) / 50 松島芳昭「実践報告戦争文学への試み―井伏鱒二「黒い雨」の中学・高校連携教育」(『月刊国語教育』一九八四・三) / 51 John T. Dorsey 「The Theme of Survival in John Hersey's Hiroshima and Iuse Masuji's Black Rain」(『国際関係研究』一九八四・七) / 52 熊谷孝 高田正夫 佐藤嗣男 荒川有史「シンボジウム」『黒い雨』の再評価」(『文学と教育(文学教育研究者集団)』一九八四・八) / 53 島田昭男「『黒い雨』」(『国文学 解釈と鑑賞』一九八五・四) / 54 磯貝英夫ほか「座談会 原爆文学をどう読み、どう教えるか」(『月刊国語教育』一九八五・六) / 55 桑名靖治「実践研究ピアニシモで綴られた哀歌―『黒い雨』」(『月刊国語教育』一九八五・六) / 56 金子博「『黒い雨』(井伏鱒二)」(『国文学 解釈と鑑賞』一九八五・八) / 57 清水昭三「『黒い雨』」(『井伏鱒二 その文学と世界』創樹社、一九八五・一) / 58 石田忠・山本和平「井伏鱒二『黒い雨』を読む」(『二橋論叢』一九八五・二) / 59 金子博「戦後の文学・論(その一)―井伏鱒二『黒い雨』」(『国文学論考』一九八六・三) / 60 松本鶴雄「井伏鱒二のナラトロジー―『武州鉢形城』と『黒い雨』を中心に」(『群馬県立女子大学国文学研究』一九八六・三)のち『井伏鱒二論全集』沖積舎、二〇〇四・二) / 61 鈴木啓一「実践研究「常民」が語る『黒い雨』」(『月刊国語教育』一九八六・四) / 62 長谷川三千子「『黒い雨』―蒙古高句麗の雲」(『から』)のち『日本精神の逆説』中央公論社、一九八六・六) / 63 河盛好蔵『井伏鱒二随聞』(新潮社、一九八六・七) / 64 ゆりはじめ「『黒い雨』井伏鱒二」(『戦後文学のフィノロジイ』桜楓社、一九八七・四) / 65

益田勝美「虚構の自立と深化をめぐる」(『日本文学』一九八八・二) / 66 石牟礼道子「『黒い雨』をよむ」(『乳の潮』筑摩書房、一九八八・四) / 67 「黒い雨(井伏鱒二)」(『近代小説研究必携 卒論・レポートを書くために 第三巻』有精堂、一九八八・八) / 68 西川長夫「ヒロシマ―原民喜の『夏の花』と井伏鱒二の『黒い雨』」(『日本の戦後小説 廃墟の光』岩波書店、一九八八・八) / 69 安岡章太郎「事実と真実―井伏鱒二『黒い雨』」(『新潮』一九八九・一)のち「歴史への感情旅行」新潮社、一九九九・一〇) / 70 石堂淑朗・今村昌平「『黒い雨』(シナリオ)」(『シナリオ』一九八九・五) / 71 井伏鱒二 井満「『黒い雨あつたやき』(すばる)一九八九・八) / 72 John T. Dorsey 「Narrative Strategies in (Black Ram) as a Film and a Novel」(『国際関係研究(国際文化編)』一九八九・一〇) / 【一九九〇年代】73 ティエン・フアム「井伏鱒二『黒い雨』―その分析と解釈」(長谷川泉ほか『井伏鱒二研究』明治書院、徳本浩子訳、一九九〇・三) / 74 小口賢「小説『黒い雨』井伏鱒二作の指導」(『平和教材の研究と実践』三省堂、一九九〇・七) / 75 松本鶴雄「『黒い雨』の時間論」(『社会学』一九九〇・七)のち『増補版 井伏鱒二 日常のモチーフ』沖積舎、一九九二・一)のち『井伏鱒二論全集』沖積舎、二〇〇四・二) / 76 川本信幹「原民喜『夏の花』・井伏鱒二『黒い雨』」(『魅力ある国語教室を創る』明治書院、一九九〇・一〇) / 77 大岡信ほか編『群像日本の作家 16』(小学館、一九九〇・二) / 78 寺横武夫「現代小説解説閑話 1 ムクリコクリの雲―井伏鱒二『黒い雨』一面」(『月刊国語教育』一九九一・二) / 79 「中国『広島県』 広島市『黒い雨』/井伏鱒二」(『国文学 解釈と鑑賞 別冊』一九九一・四) / 80 「黒い雨」(東京新聞文化部編『名作再訪 小説のふるさとを歩

- く」河出書房新社、一九九一・六)／81 斎藤真子「黒い雨」の指導について(国語科(教科研究)「名古屋大学教育学部附属中高等学校紀要」一九九一・八)／82 Sanoku Yoshida [Hiroshima — A New [raason detre] (「国際関係研究(国際文化編)」一九九二・二)／83 松岡直美「真実を探る—見合いという試練(英文)」(「国際関係研究(国際文化編)」一九九二・七)／84 松本鶴雄「創作と実録—「黒い雨」解釈の問題点など」(『増補版 井伏鱒二 日常のモチーフ』沖積舎、一九九二・一一、のち『井伏鱒二論全集』沖積舎、二〇〇四・二)／85 井伏鱒二・神保光太郎『黒い雨』その他(「四季」一九六九・七、のち『井伏鱒二対談集』新潮社、一九九三・四)／86 黒古一夫「被爆・その理不尽さのかたち—『黒い雨』、そして『地の群れ』(『原爆文学論 核時代と想像力』彩流社、一九九三・七)／87 豊田清史『『黒い雨』と「重松日記』(『風媒社、一九九三・八)／88 大江健三郎「追悼特集・井伏鱒二 揺がぬ『黒い雨』」(『新潮』一九九三・九)／89 塚谷裕一「果物の文学誌—井伏鱒二『黒い雨』に現れるケンボナシの実際の正体?」(『科学朝日』一九九三・一一)／90 梅津英世「『黒い雨』管見」(『立教高等学校研究紀要』一九九四・三)／91 萩原得司「井伏鱒二聞き書き」(『潮』一九八四・五〜一〇、のち『井伏鱒二聞き書き』(潮出版社、一九八五、のち青弓社、一九九四・四)／92 寺横武夫・岩崎文人・松本鶴雄「井伏作品の再評価—中高の教材は『黒い雨』だけか」(『月刊国語教育』一九九四・五、のち『井伏鱒二論全集』沖積舎、二〇〇四・二)／93 吉田智美「『黒い雨』の実践—生徒の主體的な読みを目指して」(『月刊国語教育』一九九四・五)／94 黒古一夫「『黒い雨』—その現代的な位置」(『国文学 解釈と鑑賞』一九九四・六)／95 安岡章太郎ほか「新潮日本文学アルバム
- 46 井伏鱒二(新潮社、一九九四・六)／96 松本武夫 安岡章太郎「『黒い雨』への道程」(『井伏鱒二』新潮社、一九九四・六)／97 東郷克美「黒い雨」(『日本現代文学大事典』明治書院、一九九四・六、のち『日本現代小説大事典』明治書院、二〇〇四・七、同増補縮刷版、二〇〇九・四)／98 リーマンアントニー・V「記録と神話—「黒い雨」(『井伏文学の本質 老釣師と日本の心下』榊敦子訳、明治書院、一九九四・一二)／99 千頭剛「井伏鱒二の戦後2—『黒い雨』に見る原爆告発」(『戦後文学の作家たち』関西書院、一九九五・五)／100 能島竜三「事実の克明な描写—井伏鱒二『黒い雨』を読む」(『民主文学』一九九五・六)／101 東郷克美「『黒い雨』—自然の治癒力あるいは言葉の戦争」(『生命』で読む20世紀日本文芸)一九九六・二)／102 星野智也「関心を喚起する試み—『黒い雨』の実践授業」(『早稲田大学国語教育研究』一九九六・三)／103 東郷克美「『黒い雨』—自然の治癒力あるいは言葉の戦争」(『国文学 解釈と鑑賞 別冊「生命」で読む20世紀日本文芸』一九九六・二)／104 榊敦子「記述への執念—『黒い雨』(『行為としての小説 ナラトロジー』を超えて)新潮社、一九九六・六)／105 豊田清史「知られざる井伏鱒二」(『蒼洋社、一九九六・七)／106 風丸良彦「メタフィクショナルとしての『黒い雨』」(『海燕』一九九六・一〇)／107 相馬正一「井伏鱒二の軌跡続」(津軽書房、一九九六・一一)／108 山下宏明「『黒い雨』を読む」(『愛知淑徳大学論集』一九九七・三)／109 蓼沼正美「『黒い雨』論—『原爆』を書くことの物語」(『国語国文研究』一九九七・七)／110 相馬正一「『黒い雨』 盗作説への反論」(『東京新聞(夕刊)』一九九七・八・六〜七)／111 豊田清史「『黒い雨』をめぐって—相馬氏への反論」(『東京新聞(夕刊)』一九九七・九・二)

／112 相馬正一「再び『黒い雨』をめぐって―『重松日記浄書決定稿』への疑問」(『東京新聞(夕刊)』一九九七・一〇・九)／113
日高昭二『『黒い雨』研究』(『国文学 解釈と鑑賞 別冊 井伏鱒二の風貌姿勢』一九九八・二)／114 相馬正一「三たび豊田氏に問う―重松日記『清書』は虚構」(『東京新聞』一九九八・三・三)／115 津久井喜子『『黒い雨』と『審判』』(『言語文化研究 中部大学女子短期大学紀要』一九九八・三)／116 豊田清史『『黒い雨』と『重松日記』問題 相馬氏に答える』(『東京新聞』一九九八・四・一五)／117 石堂秀夫「日本文学 名作を歩く(2)『『黒い雨』 井伏鱒二』」(『第三文明』一九九八・九)／118 相馬正一「『重松日記』に続編があった―『『黒い雨』異聞』」(『東京新聞』一九九八・一〇・二六)／119 内田友子「井伏鱒二『黒い雨』の位置―『体験の継承』という役割について」(『比較社会文化研究』一九九八・二)／120 杉浦孝昭「『黒い雨』この2、3年の邦画の中で一番優れております」(『おすぎのいい映画を見なさい』芳賀書店、一九九八・二)／121 井上ひさし・川村湊・成田龍一(鼎談) 戦争はどのように語られてきたか(4)井伏鱒二『『黒い雨』を読む』(小説『upper』一九九九・三、のち『戦争はどのように語られてきたか』朝日新聞社、一九九九・八)／122 松本昌介「文学にみる障害者像(39) 井伏鱒二著『黒い雨』」(『ノーマライゼーション』一九九九・七)／123 「抑制された表現―小説・映画『黒い雨』における語りの戦略」(ミック・ブロードリック編著『ヒバクシャ・シネマ 日本映画における広島・長崎と核のイメージ』柴崎昭則・和波雅子訳、現代書館、一九九九・八)／【二〇〇〇年代】 124 安徳軍一「井伏鱒二『黒い雨』(一九六六『昭和四一』)における『五彩の虹』の表徴」(『北九州大学文学部紀要』二〇〇〇・一)／125 長篠

康一郎「実証的研究のわが闘争―23―『重松日記』と『黒い雨』」(『月刊カレント』二〇〇〇・四)／126 井伏鱒二・今村昇平『『黒い雨』を語る』(『月刊 Asahi』一九八九・六、のち『井伏鱒二対談選』講談社、二〇〇〇・四)／127 川村湊「風を読む水に書く―マイノリティ―文学論」(講談社、二〇〇〇・五)／128 赤阪直子「井伏鱒二『黒い雨』論―その自然に注目して」(『国文学研究ノート』二〇〇〇・一)／129 谷沢永一「『重松日記』の発刊を求める―井伏鱒二『黒い雨』の元本はなぜ日の目をみないのか」(『Voice』二〇〇一・三)／130 重松静馬「重松日記」(筑摩書房、二〇〇一・五)／131 相馬正一「『黒い雨』と『重松日記』―井伏鱒二『黒い雨』盗作論争に終止符を打つ決定的論考」(『新潮』二〇〇一・六)／132 林原純生「『黒い雨』の時間と方法」(田中英・須貝千里編『文学の力×教材の力中学校編3年』教育、二〇〇一・六)／133 山折哲雄「悲しみの精神史(第18回)井伏鱒二と『黒い雨』」(『Voice』二〇〇一・六)／134 相馬正一「幻の『重松日記』の完全翻刻―『黒い雨』解説の必見資料」(『ちくま』二〇〇一・七)／135 川口隆行「『原爆文学』という問題領域―『夏の花』『黒い雨』の正典化、あるいは『原爆文学史』」(『プロブレマティク』二〇〇一・七、のち『原爆文学』という問題領域』創言社、二〇〇八・四、増補版二〇一・五)／136 猪瀬直樹「『重松日記』出版を歓迎する―『黒い雨』と井伏鱒二の深層」(『文学界』二〇〇一・八、のち『ピカレスク 太宰治伝』文芸春秋、二〇〇七・三)／137 長篠康一郎「実証的研究のわが闘争(39)再び始まった『黒い雨』論争」(『月刊カレント』二〇〇一・八)／138 谷沢永一「猪瀬直樹『作家の沈黙 文学の終焉―文壇に問う『黒い雨』』はほんとうに戦後文学の傑作か」(『Voice』二〇〇一・八)／139 寺横武夫「ム

クリコクリの雲―『黒い雨』と『重松日記』と(『国語通信』二〇〇一・九)／140 相馬正一『重松日記』の避難コース判明―読者の投書から(『ちくま』二〇〇一・九)／141 長篠康一郎『実証的研究のわが闘争』(40)『黒い雨』問題と豊田清史(『月刊カレント』二〇〇一・九)／142 畠中康男『日・英翻訳文の表現学的考察』(『表現研究』二〇〇一・一〇)／143 長篠康一郎『実証的研究のわが闘争』(42)猪瀬直樹と『黒い雨』問題(『月刊カレント』二〇〇一・一一)／144 山折哲雄『『黒い雨』は「盗作」ではない―白骨の御文章』の旋律こそ井伏による鎮魂の祈りだ(『Voice』二〇〇一・一一)／145 小林純子『井伏鱒二『黒い雨』論』(『平濁』二〇〇一・一二)／146 相馬正一『井伏鱒二と重松静馬―『黒い雨』成立の経緯』(『資料と研究』二〇〇二・一)／147 齋藤忠利『理不尽と懐疑(『黒い雨』)』(『日米映像文学は戦争をどう見たか』金星堂、二〇〇二・三)／148 豊田清史『井伏鱒二『黒い雨』の真実―全文の9割以上が引用だった!』(『金曜日』二〇〇二・四・五)／149 林京子ほか『原爆文学と沖縄文学―『沈黙』を語る言葉』(『すばる』二〇〇二・四)／150 長篠康一郎『実証的研究のわが闘争』(49)井伏鱒二『黒い雨』の真実(『月刊カレント』二〇〇二・六)／151 松本鶴雄『『黒い雨』は盗作か?』(『修羅』二〇〇二・九)のち『井伏鱒二論全集』沖積舎、二〇〇四・二)／152 萩原得司『『黒い雨』その側面(統)―井伏鱒二の作品について』(『尊魚』二〇〇三・三)／153 黒古一夫『『黒い雨』をめぐる言説―再検討―豊田清史批判、その他を軸に』(『尊魚』二〇〇三・三)／154 家田満『『黒い雨』盗作説への疑問』(『尊魚』二〇〇三・三)／155 『尊魚』編集部『『黒い雨』盗作説検証』(『尊魚』二〇〇三・三)／156 増村照子『井伏文学における『黒い雨』の考

察―『黒い雨』と『重松日記』の比較を中心に』(『道都大学紀要・美術学部』二〇〇三・三)／157 内田友子『自動変換システムと副作用―『黒い雨』盗作騒動、その他』(『原爆文学研究』二〇〇三・八)／158 野坂昭雄『今村昌平と原爆の表象』(『原爆文学研究』二〇〇三・八)／159 松本武夫『『黒い雨』―井伏鱒二と重松静馬』(『日本の作家100人 井伏鱒二―人と文学』勉誠出版、二〇〇三・八)／160 村上護『『黒い雨』(井伏鱒二)』(『教科書から消えた名作』小学館、二〇〇三・一一)／161 Thomson Takeshi Arthur『カミツのペスト』と井伏の『黒い雨』におけるトラウマ、記憶、アイデンティティ(『比較文化研究』二〇〇四・七)／162 『井伏鱒二『黒い雨』―原爆ドーム』(『日本経済新聞社編』『名作のある風景』日本経済新聞社、二〇〇四・九)／163 楳林晃二『井伏鱒二―日本近代文学史の新構想』の媒材』(『芸術至上主義文芸』二〇〇四・一一)／164 前田貞昭『講演』井伏鱒二『『黒い雨』は盗作だったのか?』『重松日記』との関連から』(『愛媛国文研究』二〇〇四・一二)／165 越前谷宏『国語教科書の中の戦争―井伏鱒二『黒い雨』の場合』(『龍谷大学論集』二〇〇五・一)／166 千種キムラ・ステイブン『ニュージャーランドの非核政策と『黒い雨』、祭りの場』(『声・映像・ジャーナリズム』二〇〇五・三)／167 津久井喜子『破壊からの誕生―原爆文学の語るもの』(『明星大学出版部』二〇〇五・七)／168 内田友子『平和運動』の描かれ方―『ヨイコト』はよくないことか』(『原爆文学研究』二〇〇五・八)／169 豊田清史『井伏鱒二著『黒い雨』の内実 書誌学的検証』(創元社、二〇〇五・一〇)／170 福岡良明『国民のアイデンティティと『被爆』―『長崎の鐘』『原爆の子』『黒い雨』』(『反戦』のメディア史 戦後日本における世論と輿論の拮抗』

世界思想社、二〇〇六・五)／1771 大塚英志「『文学』とは「私」でない誰かのために「私」がなしうることはないのか―扱おう作品 井伏鱒二『黒い雨』(『初心者のための「文学」』角川書店、二〇〇六・六)／172 YAMAORI Tetsuo「Forgiving the Dead ― Historical Consciousness in Civilizations That Do and Civilizations That Do Not」(『Historical Consciousness, Historiography and Modern Japanese Values』二〇〇六・一一)／173 松永京子「黒い雨は平等にふりかかるか?―環境正義で読む北米先住民文学と日本原爆文学」(『文学と環境』二〇〇七・九)／174 関谷一郎(『笑い』の系譜―井伏・太宰・梅崎・安岡)『笑いと創造』二〇〇八・三)／175 栗原裕一郎『盗作』の文学史(新曜社、二〇〇八・六)／176 鈴木康志「近代日本文学における自由間接話法の受容?―田山花袋と井伏鱒二の場合」(『愛知大学文学論叢』二〇〇八・八)／177 稲賀繁美「いま(世界文学)は可能か?―「全球化」のなかで二十一世紀の比較文学の現在を問う」(『比較文学研究』二〇〇八・一一)／178 佐藤忠男「二冊の本(3) 被爆・戦争 庶民の目が見たものは―井伏鱒二著『黒い雨』(「ひろばユニオン」二〇〇八・一一)／179 野中寛子「井伏鱒二『黒い雨』―歴史小説における史実と虚構」(『別府大学国語国文学』二〇〇八・一一)／【二〇一〇年代】180 「文学の授業デザインのために―中等学校―『黒い雨』(井伏鱒二)、「舞姫」(森鷗外)、創作」(浜本純逸ほか『文学の授業づくりハンドブック 授業実践史をふまえて 第4巻(中・高等学校編)』溪水社、二〇一〇・三)／181 ジョン・W・トリート「井伏鱒二―自然、郷愁、記憶」(『グラウンド・ゼロを書く』

水島裕雅他訳、法政大学出版社、二〇一〇・七)／182 横川唯「『黒い雨』と『重松日記』―そのユーモアと負い目について」(『語文と教育』二〇一〇・八)／183 竹西寛子「含羞と節度の彼方に」(井伏鱒二と飯田龍太)二〇一〇・九)／184 前田貞昭(『講演』井伏文学の魅力を語る(『西播国語』二〇一〇・一一)／185 菅啓次郎「黒い雨」に立ちつくして 井伏鱒二『黒い雨』(『現代思想』二〇一一・七)／186 高野吾朗「試論：小説・戯曲・映画・絵画における被爆者の『性的』描写について」(『原爆文学研究』二〇一一・一二)／187 外岡秀俊「ヒロシマからの問い―井伏鱒二『黒い雨』(『震災と原発 国家の過ち 文学で読み解く』3・11)朝日新聞、二〇一一・二)／188 滝口明祥「エクリチュールの臨界へ：井伏鱒二『黒い雨』(『学習院大学文学部 研究年報』二〇一二・三)／189 東郷克美「『黒い雨』再考―自然の治癒力あるいは言葉の戦争」(『井伏鱒二という姿勢』ゆまに書房、二〇一二・一一)／190 近藤ベネディクト(『解題・川口隆行』『元編集者が残す『日本の原爆文学』全一五巻の記録』(『原爆文学研究』二〇一二・一二)／191 格清久美子「『黒い雨』(『戦争と文学』別巻、集英社、二〇一三・九)／192 篠崎美生子「娘」の負い目の物語―(『原爆文学』からアダルトチルドレン小説へ) (『原爆文学研究』二〇一三・一二)

※ 不完全な文献一覧ですが、今後の『黒い雨』研究に資することを願って管見に入ったものを列記しました。不備がありましたらご教示いただければ幸いです。